

奈良高専 図書館だより

1986年12月 奈良工業高等専門学校図書館 発行

No. 22

記事

歴史小説を楽しむ

図書館委員(機械) 福鳶克彦
昭和61年度読書感想文コンクールを終えて

図書館委員(国語) 細井誠司
入選作品 9編
利用者と図書室

卒業生 竹本隆之

図書委員 3C 坂本昌代

” 1I 岸田 健

読書週間の展示について

後 記

歴史小説を楽しむ

図書館委員 (機械工学科) 福 鳶 克 彦

「真善美」と共に「志」という言葉が、今風の会話に相応しくないのか、最近余り聞かれなくなった。歴史小説の中には形を変えて頻繁にでてくる。歴史の激動期には、志を現わす舞台が提供されるためか、志をもった男が活躍し歴史小説に格好の題材を与えている。そういった男の典型を語るように描いて面白い作家に司馬遼太郎がいる。決して文章は上手な方ではない。試しに谷崎潤一郎の一節を読んでから司馬遼太郎の本を読むと、何とさらさらした書き方かいな、と思うだろう。主人公にぞっこん惚れこんで、いいところも悪いところも、「こいつこんな奴やで」といった調子で書かれている。

本校図書館の書架で「し」の項は司馬遼太郎の作品群がその大部分を占めている。その中で一際目立って表紙のボロボロになった数冊の本がある。有名な「竜馬が行く」である。二十数年前サンケイ新聞に連載された小説であるが今も新鮮で瑞々しく読める。表紙の補修がその人気を語っていて、この本が縁で坂本竜馬のファンになった人も多い。

竜馬は幕臣勝海舟に師事している。勝海舟の父は勝小吉といい貧乏旗本で一種の無頼漢である。甥に幕末の剣聖男谷精一郎がいる。その勝小吉の書いた本に「夢酔独言」という自叙伝がある。本との出会いはどんな形か色々あろう。中里介山の「大菩薩峠」も終りの方を読んでいて、登場人物の一人神尾主膳が「夢酔独言」を読むくだりがあって、最初、中里介山の作中作品と勘違いした思い出がある。後に平凡社の東洋文庫に復刊されたのを読んだ。その冒頭、歌が二首書いてあって、

気はながく ころろはひろくいろすく つとめはかたく 身をばもつべし

まなべただ ゆふべにならふみちのべの 露のいのちの あすきゆるとも

卒業生の寄せ書き等に引用させてもらっていた「気はながく……」の方は、最近読んだ綱淵謙錠の「徳川家臣団」中より、徳川初期のヌエ的存在、寛永寺開祖南光坊天海作の

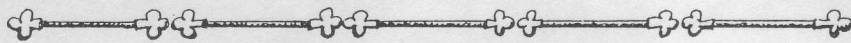
気は長く 勤めは堅く色うすく 食ほそうして 心ひろかれ

を本歌とする替歌ではないかと思っている。こういう発見は読書人の一つの楽しみである。「夢酔独言」は子母沢寛によって「父子鷹」という小説になっている。

森鷗外は、「歴史そのままと歴史離れ」を歴史小説の要諦に据えている。不連続に残っている歴史的事実は変えようもなく、その間に動く人々の心事等に作家の想像を加えて、連続した形に整え小説として提出されたのが歴史小説といわれるものである。さすれば、同じような素材を扱いながら書かれている二つの作品があったとすると、作家の想像の部分を競争させて読むのも楽しみの一つである。宮尾登美子の「天璋院篤姫」と有吉佐和子の「和宮様御留」は大奥から見た幕末史であるが、そのような一対として読めるだろう。

上にも書いた「大菩薩峠」は文庫本にして二十六冊に及ぶという未完の長編で、歴史小説というより、もっと虚構性の強い、むしろ時代小説といった分類に属するものかも知れない。机竜之助を中心に登場人物は三十数人、それぞれが一物語をなす個性的な働きをする。十津川の風屋ダムの傍に、机竜之助が天誅組の一員になって逃亡中、奸計に遭って失明した場所である旨を表した史跡立札(?)が立っている。こういうのを見ると妙な錯覚に陥る。丁度ロンドン・ベーカー街にホームズの住所を捜す人のような錯覚である。ファン心理としてはこの錯覚は醒めないで欲しい。

歴史というものを、小説を通じて鑑賞するとき、ことほどさように奥深いものを味わわせてくれる。



昭和61年度

読書感想文コンクールを終えて

図書館委員会図書部会
国語科

毎年恒例の、夏休み課題図書(4年生以上は自由選択)の読書感想文コンクールは、今回で11回めになります。応募作品の数は、475編ありました。図書館委員会と国語科の先生方が、慎重に審査した結果、次のように、9名の諸君の入選作を決定しました。氏名をここに紹介して、榮譽をたたえたいと思います。

〔最優秀〕	3	C	妹尾 泰伸			
〔優 秀〕	2	C	北村 祥子	4	E	藤野 富美
				1	E	嶋津 博至
〔佳 作〕	3	E	佐藤 公美	2	C	田中 孝枝
				4	MA	斎藤 三郎
	1	E	鶴田 修平	3	MB	井村 喜典

この他に、選考する過程で、優れていると認められた諸君は、次のとおりです。氏名を記してその努力をたたえたいと思います。

1 MA	泉 高博	1 MA	逸崎 博紀	1 MB	高橋 実	1 MB	村上 耕平
1 I	石角 二夫	1 I	中山 美奈	1 C	竹川 弘子	1 C	柳楽 行宏
2 MA	池浦 誠	2 MA	西垣 勝	2 MB	田中 泰宙	2 MB	杉本三千男
2 E	小山 良彦	2 E	田中 智崇	3 MA	南 賢	3 MA	小田原賢二
3 MB	林 竜一	3 E	大塚 左洋	3 C	松田 英敏	4 MA	上村 篤司
4 MB	柿田 佳男	4 MB	服部 誠	4 E	関 由美子	4 C	岩佐 淳一
4 C	満田 秀樹						

なお、角川文化振興財団主催「文庫による読書感想文コンクール」の奈良県コンクール（奈良新聞社共催）の一般部門に応募した4 E藤野さんの作品は、優秀賞を受賞しました。おめでとう。

以下に、校内コンクール上位入賞4名の作品について講評し、佳作までの9名の作品を掲載します。

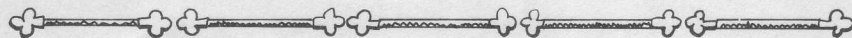
〔講評〕

妹尾君の作品……恋愛が破れれば、友情も崩壊し、とかく両者は共存しがたいものです。妹尾君は、この課題図書を丹念に読み、思索し、失恋の苦難を乗り越えて人間的に大きく成長して行く主人公に共感し、友情の真の姿を発見している。君自身の成長も感じさせられる書き方になっています。

北村さんの作品……苦難にめげず歩みつづける作者の生き方に教えられ、感動し、生きるとは勇気と優しさをもって生きることだと明快に語っている点、さわやかです。日朝間の不幸な歴史と、差別の現実についても多く学んだあとがうかがえますね。

藤野さんの作品……感想文の主題を「待つということ」と明確にしたのがよい。非常に個性的な読み方であり、書き方です。読み手が主体的な問題意識を投げ込んで読むとき、すぐれた文学は必ずこたえてくれ、独創的な「読み」の世界が成立することを思わせられます。さすがに4年生の書きぶりです。

嶋津君の作品……人間は、極限の状況下に追いつめられた時、真の姿を露呈する。読者の君は、戦場からの脱出行の人の群れの中に入りきって見えていますね。心の鼓動が伝わってくるような書き方です。戦争の悲惨さと平和の貴さと、そして生きることのすばらしさと、君もまた多く学びましたね。



「友情」を読んで

3 C 妹尾 泰 伸

中学生の時代、純粋な心で考えた友情なるものは、所詮絵空事に過ぎなかったと思うようになって、友情なんて口にするのは、気恥ずかしい。けれども、やはり私の心の奥深くでは最も気がかりな問題である。そして実際、現在までいろいろ考えてきたが私の友情観が確立しているとは言えない。そんなことから武者小路実篤の代表作でもある「友情」を読むことに決めた。

しかし、この本を読むと単に友情というだけでなく恋愛問題もからんでくる。それは小学校、中学校で友情をテーマに作文を書いたころ、純粋に友情だけを考えたのに比べて著しく複雑である。青年期の人間関係、また心理、感情のもつれなど非常に難しい問題で、いくら考えても悩んでみても正答は見つからないのではないかと思われた。大宮のように私が友情と恋愛のどちらかを選択しなければならなくなったとしたら、どちらも失いたくない。避けられるものなら避けたい。誰もが

そう思うのではないだろうか。しかし人々は本当にどちらかを選択しなければならなくなったとき、やはり、大宮のように恋愛を選ぶのだろうか。その時友情は排除され、破棄されなければならないのであろうか。

主人公である野島が杉子を真剣に愛しているということ、そして彼女をあこがれる気持ちは、ひしひしと伝わってくる。しかし私には、いちずに杉子を思う野島がとても小さく思えた。むしろ大宮のほうが大きな人間という印象を受けた。この大きな相違は、野島が自己中心的に恋愛だけに苦悩しているのに対して、大宮は自己中心的でなく、野島への友情を大切に、野島をしっかり支えている点にあると思われる。

野島は、杉子に熱い思いを寄せながらひかえめな態度をとる。私は野島に似ているところがあると思った。好きな人に自分の気持ちを伝えるということとせず、相手が振り向くのをひたすら待っている野島の様子は、まるで自分を見るような錯覚を覚えた。だから、杉子が微笑むだけで、あるいは何気ない日常会話をかわせただけで親友の大宮に得意気に話している気持ちはとてもよくわかる。

大宮は野島のことを本当に心配していて、野島の恋を宥めようと努力する。友人思いのすばらしい人間だと誰もが思うだろう。だから大きく見えたのだろうが、大宮が野島のためにと思って努力すればするほど、自分を殺して杉子に野島の存在を印象づけようとすればするほど、逆効果になる。それだけ大宮は友人思いの優しい男として杉子の目にも写ってしまったのだろう。そして野島にとって悲劇が起こった。大宮と杉子はお互いに愛し合っていることに気付き、大宮は結果的に野島を裏切らなければならなくなる。大宮が野島にこのことを外国からの手紙で知らせた時、私は、野島は恋と友情の二つながら失って自殺するのではないかと思った。

私はこの「友情」を読んで、最後の最後で本当に感動した。大宮と杉子の間に取り交された手紙をすべて読み終えた時、私が野島の立場ならばおそらく二度と立ち直れないと思う。しかし野島はこの打撃の中で大宮に手紙を書いている。私が感動したのはこの手紙である。野島はその孤独から立ち上がり、脚本家として作家の大宮と決闘しようと言ひ、また、「同情してもらいたくない、一人で耐えその淋しさから何かを生む。いつか山の上で君達と握手する時まで二人は別の道を歩こう。これが神から与えられた杯ならばともかく自分はそれを飲みほさなければならない。」と書いている。そして、自分の日記には、「自分は淋しさにやっと耐えて来た。今後なお耐えなければならないのか、全く一人で。神よ助け給え。」と書いている。この言葉は野島が絶望にやっと耐えているものだと思う。これまで小さく見えていた野島が俄然大きな人間に感じられてきた。一人で耐えたあと、いつか大宮や杉子らと握手する日を期している。大宮への友情は失われなかったのだ。恋愛のライバルに敗れてなお続くこのような友情こそ真の友情だと思う。

「生きることの意味」を読んで

2 C 北村祥子

生きることの意味、生きようとする力の本当の意味とは、一体何でしょうか。この本には、そのことがある一人の朝鮮人の少年の生い立ちをとおして書かれていました。

自分の母の記憶もなく、父と兄の三人だけで暮

らした長屋の日々は、とても貧しく、苦しいものでした。それでもまだ、幼い頃はよかったのです。自分の世界というものを持たず、貧しさを貧しいと感じることもなく、ただ父と兄に見守られていればよかったからです。

しかし、はじめて外の世界、学校へ飛び出した時のことです。今まで気にすることもなかった貧しさを、そして、何よりもまず自分が朝鮮人であることを思い知らされるのです。朝鮮人でありながら、自分の名前を日本名になおさなくてはならないのです。これは、とてもつらいことだろうと思います。

それよりももっと驚いたことに、朝鮮人の人たちが朝鮮語を使うことを禁止されたことがあったのです。もし、私たち日本人が他国に支配されて、日本語を使うことを禁止されたらどうでしょう。そう考えてみれば朝鮮の人たちのつらさも分かります。こんな、恐ろしいことは、二度とあってはいけないことだと思います。

もし、私がこの少年と同じ立場にいたらどうでしょう。朝鮮人という、ただそれだけで先生からいやがられ、理由もなく後ろからなぐられたりしたら、きっと、この少年のようにひねくれ、暴力をふるってしまうだろうと思います。暴力は人を悲しくみじめにするものです。暴力をふるった後の、あの、何とも言えないさみしさを知りながら、この少年はどうすることもできなかったのです。その苦しみと悲しみは、私の胸をしめつけます。

そんな時、この少年は阪井先生という人に出会ったのです。阪井先生は、今までの先生とは全く違いました。貧乏だから、朝鮮人だからと言っているやがたり差別したりしなかったのです。阪井先生は、悪いことさえしなければそれでいいというのではなくて、悪いと思うことに立ち向かっていく姿勢というものを教えてくれたのです。もちろん朝鮮人だということが、悪いわけではないのです。朝鮮人を差別する日本の社会全体が悪いのです。だから、そういう本当に悪いものに立ち向かっていく勇気を持つことが大切なのです。阪井先生は、そうした勇気と、人を思いやる優しさというものを教えてくれたのです。先生との出会いは本当に、重大なものだったと思います。もし、この出会いがなかったら、いつまでも朝鮮人という枠に閉じこめられたままだったでしょう。朝鮮人、日本人という枠を越えて、人間というものを見つ

めていた阪井先生という人は、本当にすばらしい人だと思えます。

「生きることの意味」とは何でしょうか。この本を読むまで、私はそんなことなど、真剣に考えてみたことがありませんでした。それにもし、そう聞かれても、きっと答えられなかったでしょう。でも、今はわかります。それは、勇気と優しさを持って生きることです。くじけそうになるような苦しみや困難に出会っても、せいっぱい生きることです。それを、この本が教えてくれました。私も、人との出会いを大切にしながらせいっぱい生きて、そして、いつか大声で「生きるって何てすばらしいんだろう！」と叫んでみたいと思います。多くの困難に打ち勝ち、新たな困難に出会いながら、しかもなお、「生きるって何てすばらしいんだろう！」と叫びつづけているこの作者のように……。

“待つ”ということ

—「赤ひげ診療譚」を読んで—

4 E 藤野 富美

「若気でそんなことをいっているが、いまに後悔するぞ」

「お許しが出たのですね」

「きっといまに後悔するぞ」

「ためしてみましよう、有難うございました」

登は三年間長崎に遊学した。その後、祝言をし幕府の御番医として出発する約束もできていた。しかし彼を待ちうけていたのは、婚約者の裏切りと薄汚い小石川養生所での勤務であった。登はすべてから見放されたように思った。世の中は自分の敵ばかりではないかと疑った。

そんな彼を迎えたのは“赤髯”である。赤髯は名の聞こえた名医である。同じ診療をしても、富豪からは治療代を取り、それを庶民にまわした。常に弱者の味方である。赤髯は登のするがままにさせた。狂女に殺されかけても、手術中に失神しても、とがめなかった。登が自ら立ち上がるのを待つだけだった。

やがて徐々に登も心を開いていく。最初は嫌がっていた上衣を自ら着て、赤髯とともに治療にあたる。様々な事件を通して赤髯の人柄に触れる。そのうちに赤髯の信念に共鳴するようになる。

そして登の決断の時がやって来る。自分にふさ

わしい伴侶を得て、いよいよ御番医としてかかえられる話がもち上がる。しかし登は、出世街道を走るよりも自分の信念の道を歩む方を選んだ。赤髯の下にしようと決心したのである。最初は逃げ出すことばかり考えていたというのに……。

冒頭に記した会話はその時の登と赤髯のやりとりである。

誰にも挫折はある。苦しく死にたくなる時もある。入試、就職、恋愛、対人関係…。現代社会においてもその要因は数知れない。それは“若い”と称される時期に多い。若い時はエネルギーにあふれている。反面、悩み始めると他人の意見に耳を貸さず、自分の内へ内へともってしまふ。そうなるともうどうにもできない。心は荒れるばかりである。

赤髯はただ待った。登が自立するようにと願って。外診の途々、ポツリポツリと自分の過去をほのめかす。自分は泥にまみれた傷だらけの人間だ、泥棒や卑怯者の気持ちもよく分かるのだ、と。決して多くは語らない。だから後は想像するしかない。登は何度もその言葉を反芻する。そうしているうちに、それは赤髯の人間像として心の中にしみこんでしまうのである。やがてそれは確信に変わり、自分も強く引きつけられてゆく。そして自力で立ち上がろうと思うようになる。その赤髯のやり方は鮮やかだというほかない。

その点私たちはどうだろう。私たちは一方的な押しつけに自己満足している。相手には迷惑であるだけかもしれないのに、言葉だけは美しい文句を並べたてる。裏切られれば、あんなに親切にしてやったのにと腹を立てている。ほとんどの場合相手の立場に立つよりも自分を取り繕ったもののようにも思える。

そして自分は相手よりも優位に立っている。相手が苦しんでいても自分はそうではない。その傷や痛みを考えようとはしない。考えても相手と同じ立場に立てない。こうすれば、ああすれば、というくらいである。

しかしその押しつけはかえって逆効果になることが多い。それがよいことだとは分かっているけれども、素直に受け入れられないこともある。ところが、自分を語り過ちを悔やむひとは、自然に心の中へ入りこむ。心の中で何度も浮かび上がる。やがてそれは立ち上がろうとする勇気に生まれ変わっていく。そして立ち上がった者は強くなっている。

しかしせっかちな現代社会は、そんなに悠長に構えてはいない。すぐに善し悪しを決めてしまう。でも本当にすぐ答えは出るものだろうか。もし出てもその答えはそれでいいのだろうか。

私は“待つ”ことを学びたい。せっかちなればきくと悔やむ日が来ると思う。あたたかな目と待つことは何よりも大きな力となる。手を引っ張って立ち上がらせるのは簡単だ。でも私は自分で立ち上がり歩き出すのを待つ勇気を持ちたい。時には、待つことは最も苦痛を伴うことかもしれない。だが、自力で立ち上がった者こそが本当の強さを持っている。私はそれを信じたい。

登は立ち上がった。そして歩み始めた。赤髯とともに生きようと決心した。登は本当に強くなった。

——登が後悔することは、決してないに違いない。

「流れる星は生きている」を読んで

1 E 嶋津博至

昭和二十年八月九日、ソ連が参戦したことにより情勢は一変してしまった。著者は、観象台に勤務していた夫と別れ、一人で三人の幼児をひきつれて、新京から脱出しなければならなくなる。それから一年がかりで朝鮮半島を南下し、博多に上陸、ようやくの思いで故郷に帰りつく。「流れる星は生きている」は、その間の言語に絶した脱出行の記録である。

僕は初め、この本を軽い気持ちで読みだしたが、途中からは、作品の中に引きずり込まれ、読み終わった今は強い衝撃を受けるとともに、深い感動を覚えている。人間や社会に対する見方も少し変わってしまった。この思いを、戦争を知らない人たちに、少しでも多く伝え、この本を読むきっかけにしてもらいたい、そう思いながらこの文を書いているところである。

僕は、戦争のもたらす混乱がこれ程すさまじいものとは思ってもみなかった。脱出する同じ仲間さえ、もはや信じられる者は誰もいない。おのれひとりになってしまうのである。盗られないようにと、隠しておいたお金のあり場所さえ、まわりの者みんなが知っている。食物はろくに手に入らない。仲間を見すてて、自分勝手に母国へ帰ろうとする人さえ出てくる。読んでいてこれはとても

悲しいことだった。生死のぎりぎりの状況に追いつめられると、人間はみなこのように変わってしまうものなのだろうか。いや、今の僕は、読者の立場から批判しているが、もし自分がそういう立場に立ったら、自分もどんなことをするか知れたものではない。そんなことを考えると、自分がとても恐ろしくなってしまった。どんなにきれいごとを言っている、実際はその立場に置かれなくては、わからないものなのかも知れない。

あまりにも長くつらい脱出行のために、心身ともに疲労きった著者は、「生きることがめんどくさくなった」と言っているところがある。これには、大きなショックを受けた。生きようと死のうと、どちらでもよいと言っているのだ。そういう極限の状況にたたされたら、だれでもそう考えてしまうのかもしれない。「めんどくさい」どころか、すぐに死へと移行してしまう人もいるだろう。しかし著者の場合、その「めんどくさい」という半ば開きなあった気持ちがかえってよかったのだと思う。死んでもいい、という気持ちが新たな生きる力となって、子供をあらゆる困難から救い、一人も死なせないで故郷へつれて帰ることができたからである。

いや、自分の力だけではない。子供に助けられ、仲間からも助けられ、他人からも助けられたりしたのだ。悪い人達も多かったが、助けてくれる人達も多かった。その人達の力のおかげでもある。生死の境で、だましだまされたりしながらも、助け合い協力し合って生還できたのだから、著者は、本当は幸せ者なのかも知れない。本当の愛情、本当の思いやりにふれることができたのだ。数えきれないくらい苦しい出来事はあったが、それ以上にもっと大切なものをつかみとったことであろう。そしてそれによって、その時その時を踏みしめるように力いっぱい生きてきたのだ。

苦しい生活の中でみた友情の輝き、子供への愛情、そして、いつ何があったのか、何が起きたのかを一つ残らず「本」という形で現代に残すことができたのだ。それが、しっかりと生きてきた何よりの証である。同じ引き揚げ者の中でも、要領よく立ちまわって、きれいな服を着て母国に帰ってきた人もいる。しかし、たとえ服はボロボロであっても、子供のために自分の体を犠牲にして、帰ってきた著者のような人の方が、今の僕にはきれいに見える。

ぼくもしっかりと生きたいと思う。あの、子供

が死ぬかもしれない時に、必死で薬代をつくろうとした母親のように、輝いて生きたい、そう思う。

「兎の眼」を読んで

3 E 佐藤公美

人の心は、壊れやすく、敏感なくせに頑固でその性格はなかなか変えられるものではない。しかし、環境やその人の努力によって変わることもある。この話は人の心の変化を通して一人一人の心の奥底に光っている大切なものがどんどん引き出されている。

ゴミ処理所に勤め、そこに住んでいる家族は、貧しく、やっと毎日の生活をしているにもかかわらず、人との交わりを大切に真剣に考えている。父親の家出のため、自分で生活費をかせごうと、家庭教師をしたり、パンをこじきのまねをしてみらう子。そしてハエを飼っている子。みんな生きるために最低必要な手段だった。

ゴミ処理所のゴミは一人一人が出しているものなのに、みんなそれをいつも忘れていて処理所の人達を汚いと決めつけている。私達にもそれはいえることである。いつも汚物を処理してくれる人に感謝の眼を向けていたか？みんなどこかで誰かに頼って生きているのに、全くそれに気付かない。手を洗わずに給食当番をする子にみんなが食中毒にでもなったら大変だからやめるように言った先生がいた。その子達の親が汚くてもその仕事をやらなければ誰がやるのだろう。辛い仕事をしている親をもつ子がなぜそんな事を言われなくてはならないのだろう。自分の事だけ考えて周りが見えない人がまるで汚いゴミの山のように見える。

処理所の子供達は、みんな助け合い、生き物を大切にすることを覚えている。行動や心理には、理解しがたいものもあったが、小谷先生の「なぜ？」という疑問から小谷先生自身も子供達も変わっていく事によって、見えないものも見えてくるようになった。

鉄三は、ハエしか友達がいないから、そのハエを傷つけるものはすべて敵として憎んだ。人間の友達ならきっとすばらしい親友となっただろう。友達であるハエをたとえ醜い生き物であっても、守り、思いやる鉄三の優しさになぜみんな気付かないのだろう。私は処理所の子供達がみんな大人さえ気付かない心遣いや思いやりを人にかけられ

るのは、それだけ悲しさや寂しさ、苦しさを自らで味わっているからだと思った。

小谷先生も子供達を理解し話せるようになるまで、いろんな怖い事やつらい事があった。でもあせらず、ゆっくり苦労しながら確実に子供の心に近づいていった。学校で勉強するというのは、教師も含めてという事だと実感した。勉強が毎日の積み重ねであるように子供との会話や接触も毎日一歩ずつ近づき、一歩ずつ感激したり悩んだりすることが大切だと思った。

子供と先生との間の深まりは、子供達全員の連帯感にもつながった。初めの頃処理所の子供達をバイキンよばわりしていた子供達も処理所の子供達がストライキをして学校を休むと、「どうして休んでいるの？」と聞いてくる。子供達だけでなく大人達も処理所の人達の立場を理解し署名運動をする。社会が一つの事に向かって行動することで、困難な事も突破できる。鉄三は何もしゃべらなかったのに、文章を書いたり、絵を描いたりするようになった。でも何よりも大きな変化は、笑ったことだ。彼もまた、常に抵抗していたのではないだろうか？鉄三がハエを飼う事は寂しさの象徴である。ハエは人間に対して害を与えないのに殺される。鉄三はその時、「どうして、僕をいじめるの？」と叫んでいたのではないだろうか。みんなが人の痛みをわかる事、それは、同時に優しくなれる事だと思う。そして、その時こそみんなが本当に心から笑える時であると思った。

「変身」を読んで

2 C 田中孝枝

人間が虫に変わってしまうというこの話は、始めから終わりまで非常に不気味な感じがする。一見非現実的な内容であるが、極端な例をとって現実起こっていることを表そうとしているのではないか。

私はこの本によって、家族とは何なのかを考えた。グレーゴルに頼りきっていた家族が、彼が醜い姿へと変身したことによって、とたんに彼に背を向ける。家族とは結局、利害関係で結ばれたものなのか。それならば何の為に、何故に家族という結びつきがあるのか。

もし私が、虫にこそ変身しなくても、何もできないむしろ邪魔になる存在になったとしたら、家

族の者はどうするだろう。同情はしてくれるかもしれない。グレーゴルの妹もそうだったのだろう。しかし、一度自分に危害を加えるようなことがあれば、一たとえそれが私の本意ではないにしても一憎まれ、疎んじられてしまうのではないか。絶対にそんなことはない、と言いきる自信が私にはない。

でも、だからと言って、家族とは所詮そんなものだとは思っていない。家族とは利害関係のみで結ばれているのでは決してないはずである。母親が子供を育て、思う心は純粋な愛というものであり、父親が黙って子供達を見守るのも愛によるのである。両者とも決して自分の利というものを求めているのではない。

しかし反面、そういう「愛」が欠けている家族というのが、少なくはないのだ。これはとても悲しむべきことである。彼らは自分達の親から愛してもらえなかったのだと思う。だから子供達を愛する術を知らない。そこで利害関係と義務感とだけで成り立っている家族が構成されてしまうのだ。

この小説で取りあげられている「家族」というものもまた、極端な例なのではないかと考える。家族というものさえ、利害関係で成り立っているのだと。

現在、家族の中にあってさえ、本当に純粋に相手を受愛することは難しいのである。だがそれは難しいのであり、不可能なことではないのだ。私はそう思っていたい。そして作者カフカは冷めきった表情で嘲笑しながら、この愛の失われた社会を眺めているのではなく、嘆き、それでも希望を持って、社会に起こりつつある悲劇を必死に訴えようとしているのだと、そう思いたい。

この作品は、人間にとって最も大切な、けれども失われつつある本当の意味での家族愛というものを、暗に訴えかけているように感じられてならない。

「罪と罰」を読んで

4MA 斎藤三郎

私は、普段から青年期の鋭敏な心理に興味を抱いている。そんなこともあって『罪と罰』は是非一度読んでみたいと思いつづけていた作品で、今度これを読んでみて深い感動を受けたので感想を記すことにする。

独自の哲学を持ち、自らの論理に基づいて、一老婆を殺害するが、苦悩の果てに荒廃した精神を更生する主人公のラスコーリニコフ。また、自己犠牲に徹した生き方をし、彼を更生に導く娼婦ソーニャ。彼女は彼を世界一不幸せな人とし、彼女の肉親に接すると同じような態度で彼に対して献身する。遂に彼らは、遠くシベリアの地で初めて幸せをつかむ。

ドストエフスキーは、この作品において二つのテーマを持ち出していると思える。まず一つは、人間の弱さと内に秘めた善の心を強調していることだ。冷やかな心で完全犯罪を目論む人でも、犯行時には意識が正常に働かず、ミスを犯す。極悪非道に見える人でも善の心は持っているものだ。ラスコーリニコフの場合、完全犯罪はなしとげたが、「今にも警察が僕を捕えに来る」という強迫観念が彼を苦しめ、「楽になりたい」がために、捜査線上に名前すら挙がっていない自分の秘密を洩らしかける。またソーニャとの偶然の出会いが、彼の善の心を少しずつつき始めた。遂に彼は、自首を決意するのである。

もう一つのテーマは、罪と罰である。法の下における罪と罰、個人の観念に基づく罪と罰である。ラスコーリニコフは「一つの微細な罪悪は、百の善行により償われる」という罪に対する観念を持ち、強欲で「虱」のような老婆を殺害する。また彼は自らの秘密を打ち明けたソーニャに自首を迫られるが、法の下においての罰だけが罰なのではないと考えていた。「僕は自分を殺したんだ。婆あを殺したんじゃない！僕はいきなり一思いに、永久に自分を殺してしまったんだ！」と彼が語るように、犯罪を犯した時からずっと、苦しみとしての罰を受けてきたのである。

人は愛を否定し、一人で生きていけるのだろうか？ 非凡人は人を殺す権利を有し、凡人は非凡人に服従する義務があるのだろうか？ 僕はこのような問題について考えてみた。確かにラスコーリニコフの考えは、人間社会の真理の奥を鋭く突き、僕も彼の考えに頷くところもあった。彼は考えた。「もし俺が一人ぼっちで、誰ひとり愛してくれるものもなく、また自身も決して人を愛さないとしたら、その時はこんな苦しみなど一さい起こらなかつたらう！」。また、「もしケプレルやニュートンの発見が、ある事情のコンビネーションによって、一人なり、十人なり、百人なり、或いはそれ以上の妨害者の生命を犠牲にしなければ、どうし

でも世に認めさせることができないとすれば、その場合にはニュートンは、自分の発見を全人類に普及するため、その十人なり百人なりの人間を除く権利があるはずだ。」と。

しかし、僕の結論は、最初の問題を否定し、後の彼の考えを否定する。人は愛ゆえに悲しみや苦しみが存在するが、愛ゆえに喜び合い、助け合い、またそうすることでしか生きていけない弱い存在だからである。そして非凡人という人間（自分は非凡人だと思っている人間）は誰もみな、人を愛するがゆえに、凡人になるのである。ラスコーリニコフがシベリアの地で服役しながらようやくソーニャを初めて心から愛せたように。

やはり人は、ひとりでは生きて行けない。愛があり、愛で結びつくことによってこそ、はじめて真の人となり得るのだ。ソーニャとラスコーリニコフの物語は、僕に深い感動を残した。

「兎の眼」を読んで

1 E 鶴田修平

僕はとても感動した。この作品を選んだ理由は、作者の灰谷健次郎が好きで、もう一つは、感想文が書きやすそうだったからである。この作者の書いた本はいくつか読んだことがあるが、すべて学校、先生、生徒などの教育についての本だった。

この物語は、塵芥処理所に住む子供たちと新任の小谷先生・足立先生などが、教育の中でいろいろなことを学んで行く、感動的な話である。

はじめは、塵芥処理所の子供のうちのひとり鉄三が、担任の小谷先生を悲しませてばかりいて、口もろくにきかなかった。ある日鉄三がみんなで大切に飼っていたカエルを殺してしまった。その残酷な殺し方は、よほどつよい憎しみがなくてできるものではない。先生は考える。鉄三は何を憎んだのか。おじいさんと二人きりで住む鉄三の家を訪れた先生は見た。鉄三がハエを飼っているのを。鉄三の大切にしていたハエを、彼のクラスメイトがカエルにやってしまったのだ。鉄三は小谷先生の努力によって心を開いて行く。その時は、とても感動した。その後、鉄三はハエについていろいろ研究し、保健所もお手あげのハエ騒動を解決し有名になる。鉄三が作文の時に「……が好き、小谷先生も好き。」と書いたのがとても印象に残っ

ている。小谷先生が涙を流して喜んだのがよくわかった。

鉄三にはバクじいさんというおじいさんがいる。その人は戦争中とてもひどい目にあった。親友を裏切ってしまう、身も心もズタズタになってしまったバクじいさん。その上、息子夫婦にまで死なれ、生きる望みがない。しかし「俺の分まで生きてくれ」と言った親友を二度も裏切ったりしないため、一生懸命生きている。その姿はとてもすばらしいと思った。

小谷先生には足立先生という教員仲間がいる。その先生は子供に対する考え方、行動力がすばらしくて、子供の気持ちをよく知っているのである。足立先生のことを読むと、僕の中学の時の先生が思い出される。その先生も足立先生と同じようにおもしろく、いい先生だった。足立先生は僕の理想の先生である。この話の中で小谷先生も手本にしていた。

ある日、事件がおきる。今度、処理所が移転することになった。すると鉄三たちはその横のプレハブ住宅に引越すことになる。しかし、その場所が市場まで五十分、学校まで四十分かかり、道もダンプが通り危ない。だから移転後も旧処理所の住宅に住めるように一人一人が一生懸命世間に訴えた。そのおかげで署名が過半数をこえた。この物語は、最後どうなったかは書かれていないが、僕は塵芥処理所の人々が旧処理所の住宅に住めて正式採用されることを願っている。

この本の題名『兎の眼』の兎とは、誰のことであろうか。鉄三のように、社会をみつめる子供のことだろうか。小谷先生や足立先生のように子供をみつめる大人のことだろうか。バクじいさんのように戦争を通して平和をみつめる老人のことだろうか。それとも、この本を通して力強い希望と生きる意味をみつめる読者のことだろうか。誰でもあてはまると思う。作者の灰谷健次郎は、「兎のように澄んだ美しい眼であらゆる物を見つめてほしい」と言ったのではなからうか。僕は、そう思った。

「野火」を読んで

3 MB 井村喜典

この野火という作品は、第二次世界大戦中にフィリピンで戦った一人の日本人の戦争体験を描いた

ものである。僕がこの本を読みたいと思った動機は、「野火」が戦争を題材にしたものであるということと、文学的価値がたいへん高い小説だと知ったからである。実際、この作品は、読売文学賞というものを受賞しているたいへん高度な小説で、内容もかなり難しく、一度読んでも理解できない箇所がいくつかあった。しかし、理解して読み終わった後は、とても感動し、本の内容についてあらためて考え直してみた。

まず最初に、この小説は、フィリピンが舞台で、主人公は田村一等兵である。彼は肺結核を患い部隊を追われる。これから彼の孤独な放浪が始まり、後に異常な体験をするのである。ここで、主人公の田村一等兵は、少しも異常なところがなく、ごくあたり前の平凡な一人の男に描かれているのだ。このことは後に彼がする行動を考えるとたいへん重要なように思われる。部隊を離れた彼は病院で隊を追われた自分と同じ仲間に出会う。しかしそこは戦場である。誰も彼を助ける者はいなく、さらに孤独な放浪が続く。そして、極度の飢えと戦いながら、人肉を食べようとさえ思い、さらに人も殺したことで悩み続け、最後には友軍の兵士さえ殺してしまい狂人になってしまうのだ。しかし彼は生き残り、日本に帰ってからもこのことを考え続け、自分自身を神と結びつけながら考える。このように、人間の孤独の極限を追求したのが「野火」なのだ。

この小説の主人公は常に孤独だ。日本軍がアメリカ軍に押されて戦況が悪くなっていくにつれ、益々彼が一人で行動するほかなくなっていく。現代の通常の生活では、自分以外の人間がいることで共同生活が実現している。このことが眼を外に向け、他人を意識させることになる。しかし、この主人公のいる状況では、彼以外の他人の存在も、主人公を一人の世界に追いやることになる。つまり、自分以外の人間は誰も存在していなく、自分は常に一人であるのと同じことである。この時に主人公はどのような行動をとるか。それがこの「野火」の中で作者が一番言いたかったことではないのだろうか。前に書いたように、この主人公はとても平凡な男なのだ。その平凡な男が極限の状態に置かれ孤独の身となった時、これだけの異常な事を体験し行動するのだ。通常共同生活になじんでいる者から見れば、この行動は奇異に感じられる。しかし、自分がこの主人公のような立場に置かれているとすれば、この行動が不可解だ

とは思われないのではないだろうか。だとしたら人間の存在というものは異常なものなのだ。また、この小説は、極限の状況下での人間と神との問題をも取り扱っている。主人公は、自分が神の生まれ変わりの天使だと考え、また、自分が助かったことや人肉を食べずにいられたのは、神の助けだとも考えている。やはり、生か死かの極限の場合、人間は超越的絶対者「神」の助けを求めるのだろうか。

この「野火」では、全体的にフィリピンの空に燃え上がる野火を有効に使っている。これは、この小説の題名になっているので、かなり重要な物だろう。主人公は、野火を見付けると、いつもそれに近付いていった。それはフィリピン人の間での合図なのか、それとも他に用途があったのかそれは分からない。しかし、この赤々と燃える不気味な野火は、彼のフィリピンでの体験の中で最も忘れ得ぬ物になったのではないだろうか。

図書館と利用者

◎ 卒業生からのたより

所詮、わかることの出来ない悲しみ、頭でいくら考えても理解することの出来ない悲しみ、そして、それを包みこむ優しさ、そんなことを心に直接訴えかける本「かぜのおくりもの」を読みました。たった、数十分で読み終える作品なのに心がこんなに動かされたのは、久しぶりのことです。

最近、めっきり読書をしなくなり、たまに読んでもその本から何か自分に有益なことを盗んでやろうと身構えて読書したいように思います。もちろん、そのような本の読み方を否定はしませんが、そんなことよりも、素直に心を動かされる本に、一生の内に何度か、出来れば、一年の内に何冊かは接することができればいいな、と思っています。

今、「かぜのおくりもの」を読み終えて、衝動的にペンを取ったので、手紙の形式も無視した乱雑な文になっていますが、この「かぜのおくりもの」は、第17回の図書館だよりの中の「卒業生からのメッセージ」で紹介された本であります。このメッセージにひかれて、どんな本か気になって本屋さんで注文して買ったものですが、今、これを読んで本当に良かった（というより何かほっと

した)と思います。また、同時に、この卒業生のすばらしさを感じています。

非常に身勝手だと思うのですが、18回以降の図書館だよりを送って頂けないでしょうか。本当に無理やりに要求しているようなもので恐縮しているのですが、本を選んで読むきっかけにしたいのです。

最後になりましたが、今後の図書館と、図書館だよりの発展と充実に陰ながら応援します。

昭和61年2月2日

豊橋技術大 3年(電気・電子)
竹本隆之

● 図書館の職員の皆様 各位

P.S. 手紙の形式が無茶苦茶ですみません。でも書き直すと感動が薄れてしまうように思うので、あえて無茶苦茶なままにしてみましたことをお詫下下さい。

P.S.2 皆さん、お元気ですか?

注) 御注文どおり、No.18以下をお送りしました。

◎ 学生図書委員から

本 と 私 と

3 C 坂本昌代

本なんてもともと紙をたばねたものである。しかし、そんな見方を本当にしている人がいたら、その人にまず、素晴らしい「紙たば」1冊を進呈したい。

小さい頃から自分にとって本とのめぐり合いは素晴らしい物であった。特に小説が好きだったせいだろうか、今もその傾向が残っているようである。論文、漢文は大の苦手となってしまった。だが、そんなことはどうでもいいのである。どんな本でもいいから、自分が求めていけばいいのだ。

自分の場合、いつでも本が読みたい読みたいと思っているわけではない。読みたくない時、読む気のしない時は、1カ月ぐらいうすぐにたつ。反対に読みたい時は、狂ったように読みだすのである。そんな時はたいてい自分に何か疑問がある時である。人にきけない悩みなんで誰にでもあるであろう。それを解決したい時、本にたよるのである。

いやたよるといふより、本からさがし出すのである。そして自らの手でつかむのである。

本は自らの疑問を解決するだけでなく、自分の生きる事に対する考え方を変えて行く。様々の本を通して、自分の考えの甘さ、単純さを知るのである。

たいてい大人は、文学小説を読めとか、推理小説なんてくだらんとか言うが、私はそんな本にいいとか悪いなんてその人の感じ方なのだから、そんな簡単に言えるものではないと思うのである。一冊の本によって何か、素晴らしい物を会得出来るならば、たとえそれが漫画であろうと、貴重な自分の宝物となるのだ。

まだ自分は、読む本の数はしれたものなので、もっと積極的に、本を読んでいきたいと思う。

読 書

1 I 岸田 健

中学に入った頭初、国語の成績があまり良くなかったために、先生から「岸田君、どんな本でもいいから、これからどんどん読んでいきなさい」と言われたのをきっかけに、本を読みだすようになりました。

最初はSF小説から読みはじめ、推理、探偵小説へと変わっていきました。又、時々、教科書に紹介されたり先生にすすめられたりした本なども読みました。

今は、本を読み始める前にくらべると、朗読や読解が、わりと楽にできるようになりましたが、まだまだ正確に読み取ることができないし、文章を書くのも、あまり上手にはできません。だから、推理小説ばかりではなく、文学作品といわれているものをもっとたくさん読めば、読書の良さ、深さも同時に知ることが出来るのではないだろうかと思います。

これからもずっと、本をたくさん読み続けていきたいと思っています。

自分が今まで読んだ中で、能重真作「ブリキの勲章」、遠藤周作「海と毒薬」、宮沢賢治「銀河鉄道の夜」が特に好きです。

推理小説では、横溝正史、森村誠一、山村美紗、斎藤栄、江戸川乱歩、赤川次郎、和久峻三、高木彬光、アガサ・クリスティ、ウィリアム・アイリッシュ、エラリー・クイーン、モーリス・ルブ

ラン。他に眉村卓、半村良の作品が、とても好きです。一度読んでみてはどうですか。

1986年読書週間「児童文学とファンタジー」

1986年の夏、日本で二つの図書館活動に関係のある国際的な会議が開かれました。一つは I F R A (国際図書館連盟)、もう一つは「1986年・子どもの本世界大会」です。それに便乗して今年の読書週間のテーマを決めました。子供の本ナンテ、と思った人もいるかもしれませんが、例年どおり、高専祭と重なり、11月中はそのまま展示して観察したところでは、割合に関心が持たれていた様に見えました。ただ残念だったのは、夏休み中の作業でくたびれはてた図書室は、アンケートや意見などを集める、ということをしたしませんでした。例のごとく、「意見箱」「目安帳」を利用して感想などをきかせて下さい。下に、展示した児童文学図書の一部を掲げておきます(順不同)。

〔読書週間「児童文学とファンタジーの世界」展示本リスト〕

(複製版)世界の絵本館—ベルリン・コレクション	ノンちゃん雲に乗る	石井桃子	角川		
一括	北極のムーシカミーシカ	いぬいとみこ	理論社		
はてしない物語	ミヒャエル・エンデ	岩波	ながいながいペンギンの話	〃	〃
モ	モ	〃	だれも知らない小さな国	佐藤さとる	〃
遺産相続ゲーム	〃	〃	ちびっこカムのぼうけん	神沢利子	〃
ゴツゴローリ伝説	〃	〃	ぼくは王さま	寺村輝夫	〃
ジム・ボタンの冒険1. 2	〃	〃	ペロ出しチョンマ	斎藤隆介	〃
鏡のなかの鏡—迷宮—	〃	〃	兎の眼	灰谷健次郎	〃
指輪物語1—6	J. R. R. トールキン	評論社	太陽の子	〃	〃
ホビットの冒険	J. R. R. トールキン	岩波	きみはダックス先生がきらいか	〃	岩波
トムは真夜中の庭で	フィリパ・ピアス	〃	天動説の絵本	安野光雅	福音館
大きな森の小さな家	R. I. ワイルダー	福音館	魔法使いのABC	〃 雅一郎	童話屋
星の王子さま	サン・テクジュペリ	岩波	優さしごっこ	今江祥智	理論社
六月のゆり	バーバラ・スマツカー	ぬぶん	タロ・ジロは生きていた	藤原一生	教育出版
ドリトル先生物語(13冊)	ロフティング	岩波	キューポラのある街	早船ちよ	理論社
ふしぎの国のアリス	ルイス・キャロル	〃	長編青春小説集	早乙女勝元	〃
クマのプーさん	A. A. ミルン	〃	滝平二郎きりえ画集	滝平二郎	講談社
イソップのお話	河野与一訳	〃	わたしは猫花の町で見た夢	串田・雨田	〃
エンパイヤステートビル解体	デビッド・マコーレイ	河出新社	たいようのおなら(児童詩集)	長新太	サンリード
			どきん(少年詩集)	谷川俊太郎	理論社

〔後記〕

今年の夏は、蔵書点検をかねて、近い将来、貸出しを含むカウンター業務を電算化に移行するため、書籍全体にバーコードを貼る、という作業をいたしました。このため、仕事が増えてくたびれはてしまいました。

新しい「こころみ」として今、まじめな「漫画」が売れています。